

ガザとギリアド・シャリート

2009年12月6日 アシエル・イントレーター

ガザとギリアド・シャリート

今週ガザの街角でギリアド・シャリートさんの解放に近いという噂が流れています。もしかしてそうかもしれないし、そうでないかもしれません。

2005年夏の撤退時、イスラエルはガザからすべての住民(9000人)を立ち退かせ、すべての兵士たちを撤退させました。その直後ハマスがそこを支配し、新しい状況を平和のためでなく、イスラエルを攻撃するためにガザ地区の武装を始めました。

2006年6月25日、イスラエルとガザの境界を越えてきたテロリストグループは数名の兵士たちを殺害し、ギリアド・シャリート伍長を誘拐しました。2007年10月、ガザの福音共同体のリーダーの一人であったラミ・アヤド師がイスラム教テロリストによって殺害されました。2008年、ガザから数千発の原始的なロケットがイスラエルに向けて、意図的に一般市民が集まる場所に向けて発射されました。

2008年から2009年の冬、ハヌカの時イスラエルはハマスの軍事、兵站、そして管理機能を破壊するために「キャスト・レッド作戦(注)」を実行に移した。

注:キャスト・レッド作戦:イスラエル国防軍は、12月27日に始めたパレスチナ自治区ガザ地区への攻撃を“Operation Cast Lead”(キャスト・レッド作戦)と命名した。直訳すると「鑄造された鉛作戦」となる。(Wikipedia: “Operation Cast Lead”より。)

ギリアド・シャリートが解放される可能性は、イスラエルを奇妙な道徳的板挟みに立たされることとなります。彼を取り戻す「交渉」として、有罪判決を受けた犯罪者であり、多くは「その手は血塗られている」1000人近い捕虜を解放しなければならないのです。イスラエルはギリアドを生きのまま取り戻すためには、いかなる犠牲も払う意思がありますが、その一方では、これほど多くのテロリストを解放することは、さらに大勢の人々の命が失われることとなるのです。

ガザの希望

ガザの住人やその他の人々にとって唯一の希望は、メシアであるイエシュア(イエス)による救いです。私たちはイスラエルの自分たちの民に対するように、イスラムとアラブ世界の失われた人々に福音が届くよう全力を傾けています。

しかし、私たちには彼らに福音を届けることができません。それゆえ、私たちは祈り、命を賭してイスラム教徒に福音を分かち合おうとするアラブ・クリスチャンに経済的な支援を行っています。最近私たちはガザに、才能豊かなアラブ宣教師であり使徒である「V」兄弟を送り出す特権に浴しました。ガザでの活動に関して「V」師からのコメントです：

2009年11月26日からガザでの宣教旅行に関し、主は非常に祝福して下さっています。全部で4つの集会在ガザ・バプテスト教会で行われ、合計175名が集まりました。4日間で45名の男女がキリストに命を明け渡しました。すべての栄光は神のみに帰すのです。

2007年10月、ガザの聖書協会で奉仕したラミ・アヤド兄弟(30歳)の殉教に続き、教会は混乱に陥りました。集会を6ヶ月間一つも開くことができませんでした。教会の牧師を含む何組みかの活動的なクリスチャン家族は、実際に命が狙われる危険性ゆえにガザを離れることを決めました。教会の指導者らは一週間に一回、日曜日だけに再招集することを決めました。最初ほんの少人数しか集まりませんでしたが、徐々に増えて25から30名が定期的に集まるようになりました。このようなリバイバル集会は、この2年間で初めて開かれたのです。

ガザの人々には希望が必要ですが、まったくありません。彼らには政治的、経済的、宗教的な希望はありません。人々はガザという大きな刑務所に住んでいるのです。表面上生活は普通に見えますが、この悲痛な事実が一方ではあるのです。彼らが見捨てられていないことを兄弟姉妹が知ることは、彼らにとってすべてであり、価値があるものなのです。多くが悲劇的な話をしてくれました。ある親愛なる40代後半の姉妹は2009年のガザ戦争で息子と家を失いました。多くが精神的、身体的外傷に苦しんでいます。数千人の人々が惨めな貧困生活を送っており、就労人口の75%という驚くほどの数が失業しているのです。

私たちはガザの教会指導者の「F」師から、V師の活動について感謝しているという返事もらっています。(ガザにいるクリスチャンにとって、イスラエルのメシアニックジューが共に立っていていてくれることを知るのは大変な励ましなのです。)主が大いなる収穫を与えて下さることを彼らは祈っています。

死に至るまで忠実

ハヌカ(宮きよめの祭り)の主題の一つに、死に至るまで忠実(ヨハネ 10:15-18, 22)というのがあります。イエシュアご自身死に至るまで忠実でした。

ピリピ 2:8「キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」

イエシュアの十字架の死は罪の赦しを与えて下さいました。これはまた主がそうであったように、私たちが死に至るまで忠実であれという見本でもあるのです。

ピリピ 2:5「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」

スミルナの教会への手紙にも強く勧められています。

黙示録 2:10「(前略)死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」

黙示録のこの箇所は 2000 年前の教会だけに強く勧められているものではなく、終わりの時の艱難の間、信仰に立つものすべての人に対しても勧められているのです。

弟子であることの主要目標は「キリストのようになる」ことであり、イエシュアの似姿に合わせていくことなのです。私たちは主の聖なるご人格と愛に合わせて行き、聖霊の油注ぎによる力を受け、そして死に至るまで、主と共に苦難を受けるのです。

ピリピ 3:10-11「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」

主の死にならうということは、ただの殉教ではなく、日々従順であること、自己中心に対して死ぬこと、そしてプライド、欲情、そして心配を克服するのです。

福音による最初の殉教者はステパノ(使徒 6-7 章)でした。彼の証はあまりにも強力であったため、使徒パウロが世界中を回って活動する動機付けとなったのです。ヨーロッパで最初に福音を受け取ったのは「ステパナ」一家(1コリント 1:16, 16:17)であり、それはあたかも神が「あなたがたの罪は赦された。」そして「ステパノの証は彼の死後にも実を实らせるのだ」とおっしゃっているようです。

ハヌカの前夜祭のこの時、ギルアド・シャリートさん、ラミ・アヤド師やガザにいるクリスチャン、そしてイスラム教のテロによって苦しんでいる人々を祈りに覚え、死に至るまで忠実であるよう私たち自身を再び「献げ」ましょう。